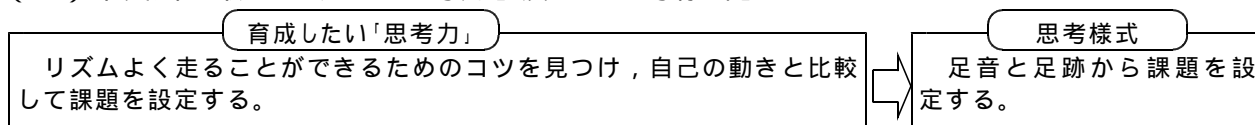


3 「焦点化，精緻化」に働きかける学習指導の実際

「リズムを感じて ハードル走」

(第5学年)

(1) 本実践で取り上げる「思考力」及び「思考様式」



(2) 4視点に照らした授業づくり

これまでの授業実践

従来のハードル走であれば，インターバルのコースやハードリングを練習する場を多様に設定し，自己の好みに応じて選択させる学習が展開されてきた。確かに，個に応じた場が設定されることで，主体的に練習に取り組むようになる。

しかし，リズムよく走るための技術的な観点は多様にある。そのような中，多様な場を設定して「リズムよく走るためのコツ」について考えさせても，取り組んでいる場の数だけ多様なコツが出ることになり，全ての子どもたちに共有化させることは難しい（焦点化の必要性）。また，課題を設定する際にも，自己の動きとなりたいイメージとを比較するために必要な情報が少ないため，主観的に判断して課題を設定せざるを得なかった（精緻化の必要性）。イメージを共有化できなかつたり，客観的に自己の明確に設定されなかつたりしたことによって，場の選択が課題に応じたものではなく，好みに応じたものになっていたのではなからうか。

個に応じた場を多様に設定し練習するだけでは，自己の動きとなりたいイメージとを比較し，そこから課題を設定する「思考力」を確実に定着させることが不十分であったと考えられる。

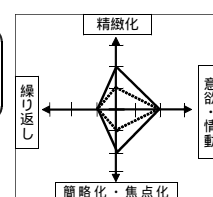
「焦点化，精緻化」を図る開発教材

そこで，本時ではリズムよく走ることができていない理由を，ハードル前後の場面に限定して，自己の走りから気付かせるようにした。

足音（聴覚）と足跡（視覚）に着目してリズムよく走るコツを見つけ，その両者から自己の課題を設定する学習

リズムよく走るコツを見つけるとしても，ある場面に限定して学習を展開しなければ，共通のなりたいイメージがもてず，意味ある交流活動を展開することができない。そこで，多くの子どもたちがあまり課題としてハードル前後の場面に焦点化して活動を行っていく。その場面において「またぎ越すためのコツ」について見つけていくのである（焦点化）

また，課題を設定する際，自己の動きとなりたいイメージとを比較するための手段がなければ，両者を結び付けることはできない。そこで，足音をはっきりと捉えさせるために体育館で実践を行うこととする。また，足跡を残すために，ペアをつくり友達の足取りを見てお手玉を置き視覚化させるようにする。このようにして，自己の動きとなりたいイメージとを足音と足跡から自己の動きを振り返り課題を設定するのである（精緻化70p注1）。



【足跡を視覚化する】

(3) 開発教材の有効性

子どもの様相から

《ハードリングの前後に焦点化してコツを見つける》

ハードル走の記録を向上させるためには、インターバルの走り方や細かなハードリングの技術など多様な観点がある。その観点の全てを授業で取り上げれば子どもの思考は拡散してしまい、なりたいイメージを明確にもつことはできない。そこでリズムよく走るコツを見つけるため、ハードリングの前後の場面に限定して考えさせた。



【なりたいイメージの共有化】

一人の子どもから「どうすればリズムよく走れるのだろうか。」という疑問が出た。このことについて全体で話し合うと、「足が合う場で走れば。」「もっと大腿で走れば。」と多様な意見が出された。しかし、意見が多様であるために、どの課題に取り組むべきかが判断しにくい状況になった。そこで、ハードリングの前後の場面に限定して考えていくこととした。

そうすることで「どうすれば低くまたぎ越すことができるのだろうか。」という課題をもち、リズムよく走るためのコツをハードリングの前後の場面から見つけ出そうとした。

足音を聞いていく活動の中から「リズムよくまたぎ越す」ことによって「またぎ越す間のリズムが短くなる」ことには気付いたものの、自己の動きと結び付けて課題を設定することは難しいようであった。そこで、以下のように授業を展開していった。

《自己の動きとイメージを足音と足跡から結び付ける》

「足音」と「足跡」の2つの視点から課題を設定することとした。足音だけでは見えなかった課題を、足跡からも見つけるようにする。こうすることで、より課題を明確に設定することができるようにした。

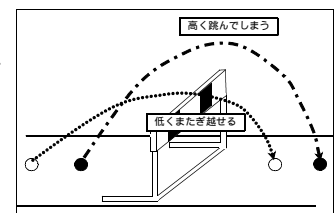


またぎ越す間のリズムを短くするためにはどうすればよいか、足音と足跡の両面から捉えることにした。すると、「遠くから踏み切って、近くに着地すればよい」ことが明らかになった。そこで、なりたいイメージと自己の動きを結び付けて課題を設定することとした。その際、足音は自分で確認しながら活動を行った。また、足跡はペアにお手玉を置いてもらい、走った後に足跡からなりたいイメージと結び付けて走りを確認していった。

しかしながら、インターバルを7mに揃えたため「7mになったから足が合わなくて、高く跳んでしまう。」という声が聞こえてきた。ハードリングの前後の場面に限定してコツを見つけたが、うまくいかない原因をそれ以外の場面から考えている子どもがいたのである。また、足音と足跡を別々に捉えてしまう子どももいた。そこで、「ハードリングの前後の走り方に問題ないのかな。」と再度ハードリングの前後の走り方での場面に限定するよう声をかけるとともに、走っている際の音を教師が声に出して表すことにした。

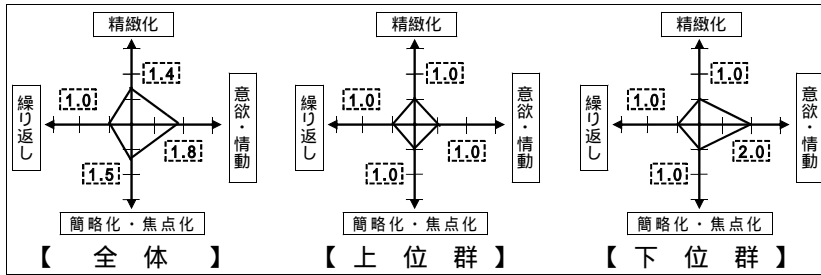
すると、「ターアーン」と音が長くなっている子どもは、ハードルの近くから踏み切っているから高く跳んでいることが課題として明らかになった。足音と足跡をつなげることによって、自己の動きとなりたいイメージを結び付けて課題を設定することができたようであった。

しかしながら、歩数が合った子どもは課題を足音と足跡をつないで設定することができたが、そうでない子はやはり課題はインターバルであると捉えたままであった。



【踏み切りと着地の関係】

以上のような展開において、全体、個（上位群，下位群）それぞれの子どもの様相から「4視点に効果が見られたか」についての見取りを行ったところ、次のような結果であった。



全体においては、焦点化，精緻化の視点において，概ね効果が見られたのではないかという意見が寄せられた。

しかし，上・下位群においてはその効果が見られず，逆に上位群においては意欲・情動は低下したのではないかという指摘もなされた。

授業リフレクションにおいては，本教材をどのように改善していけば有効な教材になるか話し合わせ，下記のような改善案があげられた。

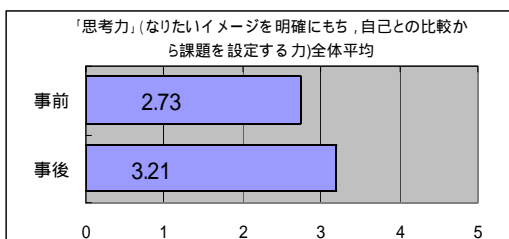
- a) 子どもたちが自由に選択したハードル間で練習を行うこと
7 mにするのであれば，事前に経験させておく必要がある。
それぞれの観点で観察する時間を十分に確保する必要があったのではないか。
- b) よい例と悪い例の比較を行い，なりたいイメージの共有化を丁寧に図ること
- c) 何と何を比べるのか，対象を明確にしておくこと
まずしっかりと自分の足音を聞かせ，そこから足跡に移っていけばよかった。
- d) リズムとともにスピードにも目を向けさせ，リズムが崩れるとスピードが落ちていることを事実として伝えること

検証データから

開発教材が「思考力」（なりたいイメージを明確にもち，自己との比較から課題を設定する力）の向上や思考様式（足音や足跡からコツを見つけ，自己の課題を設定する）の長期記憶化に効果があったかを検証した。

検証問題は，なりたいイメージから自己の動きと比較して課題を設定することができる問題を5題を事前・事後に実施した。さらに，思考様式を問う2題を事後と1か月後に実施した。これについては，思考様式を長期に把持しているかどうかを検証するため，事後において，「リズムよくハードルを走るためのコツ」と「自己の課題を見出す際の観点」として足音と足跡の両方について書いている子どもを対象に，1か月後の人数の増減を比較することとした。

「思考力」を問う問題については，5点満点で事前平均2.73点，事後平均3.21点と向上した。



概ね効果があったと考えられる。思考様式の把持については，事後に完全正答であった子ども20名中1か月後も完全正答した子どもが17名いた。思考様式を半数の子どもしか会得できていなかったことには課題はあるが，会得した子どもにとっては，思考様式の記憶の把持に効果が見られたと考えられる。



【事後テストの問題】